

を語りあいながら、遠い故郷に思いを馳せる時、朝露の如き儂き命を一日なりとも長生きしたい、明日の生命の保証なき戦場で散りし戦友に馬鹿な戦争であつたといひ切れるだろうか。

戦争の善、悪は生き残つた者のいう事である。

戦場で散りし友は語らず。黙して語らず。己を捨て国に捧げし戦友を、生き残りし我々は生命の続く限り、語り続けなければならない。また記録しなければならない。後世に伝え知つてもらわねばならない。

祖国日本の平和を願ひ、鮮血にまみれた戦友よ。何といつてよいだろう。地下に眠る戦友に捧ぐ慰めの言葉はまさに筆舌に尽くし難き思いであり、眠る戦友の声無き声を聞き取らねばならないと、常に思うものである。

湘桂作戦

包囲された鉄道工作大隊

香川県 平田雅仁

湘桂作戦は京漢―湘桂鉄道を、さらに仏印まで打通するのだということは、当時の私共鉄道兵の知る所ではありませんでした。株州辺も長沙と同じで食料が少なく、あちこちと食物を探し、農民出身者は大活躍だったが、自分の食料さえ充分に調達できません。一般に移動中の食事は分隊単位、部隊輸送中は兵站給与だが、戦場では食事どころではない時も多かつた。

私は衝陽攻略後、前線へ追求する我々鉄道大隊の状況、特に小部隊が敵の包囲を受け、戦闘力の少ない私達が戦いつつ南下していった戦闘の状況と、兵隊たちの心理などを述べたいと思います。

昭和十九（一九四四）年八月上旬、長くかかった衝陽攻略戦もやっと終了したが、衝陽攻略戦は手間取りました。

五月下旬に湘桂作戦開始され、六月二十六日に衝陽飛行場を占領してから、日本軍を中国軍が囲み、それをまた日本軍が包囲するということで、日中両軍が衝陽の周囲にひしめきあつて戦つていたのです。

八月八日、日本軍が完全占領しているというからと我々は安心した気持ちで南下を続けていた八月二十六日現在、梁口出発前より状況が悪い。未だ残兵が包囲網を潜り、兵站線がやられていた。このような状態とは夢にも知らぬ我々は本隊への追及を急いでいました。

進路は緩い傾斜で、私達の終始歩いている線路と両側の畑は面一（つらいち）で、障害物のない開潤な地形でした。左山側二〇メートルの独立小屋広場で我が加藤小隊は休憩する。敵状偵察の下士官斥候として、飯塚軍曹を長とし、鉄道四連隊

材料廠出身の新井伍長と私が、重大任務の特命を受け出発しました。

十分も進むと、右下の湘江岸に部落が見える。左の畑はもう線路より少し高く傾斜があり、鉄道の電話線が上空を走っている。その先は森でした。

しかし、初秋の小春日和なのに何か殺気というか、危険な怪しいものを感じるのです。第六感というものでしょうか。「何か、殺気立つて」と誰かが言う。

殺気とは「無き有りて、為す在りと為す」という。他に走獸はなく、空に飛鳥もなし、である。人の生活の跡は生々しくあるのだが、部落から二〇メートルのこの高台に、物音一つ伝わらないのは極めて不自然です。嵐の前の静けさ。絶対無音は死の世界で、恐怖すらあります。三人で顔を見合わせ、異常感に緊張しました。

動く、畑に動く物がある。左前方の電柱に一人

の兵隊が登り、電話線を切断し始める。「敵だ！」
彼らは線路上の私達三人がいるのを、遠方から見
ているのに、この大胆な行動は有力な援護隊が控
えているのは明白です。「敵との遭遇では、戦闘
は避ける」のが斥候の本旨だから、敵情報に帰
る。

しかし、我が軍は前進しなければならぬ。右
の湘江は浸蝕のため河底が低く、江水はのびやか
に線路に接近する。左の森は疎林のある一〇〇
メートル程の山陵に変わり、樹間後方に「動く物
がある」と、誰ともなく騒ぎだす。戦場では動く
物には重大な関心以上のものであります。

敵兵は線路上の台車を引く私達の一隊を監視
し、追尾しながら追いつけて包囲網を縮めてい
る。隊はそのままこれを無視し前進する。山陵は
線路に接近し、とうとう三門駅に辿り着いたが、
駅舎は三メートルも下にあります。その下は小さ
な部落を挟んで更にその下は湘江です。ここで抵
抗しても、我々鉄道隊は戦闘力も弱く包囲され自

滅するのは明白です。

山の稜線は禿げて樹木は無く、河谷がなく、乾
燥して歩きよい。そして、下方の小さな音でも反
射し、拡声され、見通しもよく、射砲撃戦にも先
制攻撃の利点がある。しかし他方、四囲から発見
され易い欠点もあるが、日本兵は移動、偵察、食
糧調達と稜線を歩く時も多く、山陵の多いここ湖
南省でも、また我々軍隊語としても「稜線」とい
う言葉を多用しています。

敵が包囲追尾しているので休憩どころではな
く、尚も一路南下する。駅を出外れ、場内信号機
の所にくると、銃声一発。いよいよ戦闘開始だ、
もうこうなると無視してはられない。他の山裾
の傾斜畑の先の民家の庭に入り、敵情を偵察、隊
長も双眼鏡で見て「斜面を敵兵」と報告。いよいよ
「部隊創設、直ちに任地追及」という命の途
次、最初の戦闘が始まろうとしている。

編成早々だ、隊員同士の意志の疎通は充分でな

く、立姿で近づくと敵に対する。私は心中「この姿勢ではよくない」と思うが、遠慮があり口に出しにくい。七、八発応射したら、板を横にした疎い柵から中国兵が一人飛び込んで来た。立射の姿勢でいる我々に、至近距離、負傷した敵兵は両手を合わせ、涙を流し助命を乞う。坂元上等兵が介抱するが絶命してしまう。死体はそのままにした。敵兵の持った自動小銃を鹵獲したが、しかし結果的にはこのような小競り合いで済ませたのが悪かった。

ここは大した事もなく敵から離脱、山も急峻になり、敵も稜線からは追尾できない。線路は山側コンクリート擁壁のため、湘江に近づいていた。右に半径一五〇〇メートルから二〇〇〇メートルもある曲線で、日本の国鉄より雄大だ。遮蔽物がないから危険だが、幸いに後方の線路には敵影はない。気も急いだためか、途中の昭陵駅を気付かなかったのは、駅舎が破壊されていたためだったかも知れません。

やっと谷間の狭い平地の南に、なかば崩れた駅に辿り着く、「湓田駅」という。友軍の兵士も二、三十人はおり早速情報交換をする。「隼部隊が一人食糧調達でやられた」という。飛行隊が何故、ここに居たのか、連絡兵とのことだ。「何回も敵襲があつた」とか早口だが疲労している様子だ。隊長はまだ通じている駅の壁掛電話で河畔の熊倉中隊長と連絡する。

「状況はますます悪いが、来るなら一刻も早く追及せよ。私はそこに止まるよう希望する。しかし、決定は貴官にある」との返事である。しかし通話の途中で電話線が切断され、不通になってしまい、以後の連絡も指示も受けられなくなった。隊長は「下土官集合」を命じたが、隊長以下切迫感がある。まさに「山雨至らんと欲して、風楼に満つ」の句のような実感があつた。

風雨強かるべし。台風の目に巻き込まれた気持ちですが、諸般の情勢は不明のため、「前進」と

隊長は決意し出発した。駅南方、場内信号機を出はざれると、すぐ五メートルの溝渠、渡ると敵は既に駅と我が隊の間に割り込んで山から射ち出す。振り返りながら林に散在する敵にも応戦するが、分断戦争にはめられた感がある。樹林は下草が少ないので見通しはよい。

駅の右、山側の三角形に切り残された山頂では白兵線だ、もう退却はできない。暗澹たる気持ちになる。ここからでも敵を圧迫して駅に引き返すのがよかったが、これは結果論である。やむなく、右斜面の林を伝いながら前進、二メートル程行くと急に左の山がなくなり、線路は水田の中の盛土に変わる。とにかく、百戸程の無名部落まで進んだが、南前方、水田に潜伏する敵を発見。隊は行く手も阻まれたのでそこで大休止。三〇〇メートル後方の丘も敵に占拠されていて、既に退路もない。進退極まれりだ、時に二十六日午後三時でした。

隊は敵の包囲下にあり、全員、線路西斜面と部

落間の窪地に待機する。すぐ南の塗田駅南橋梁は鉄筋コンクリート橋、その川原は水がなく草地。川は東より線路下から右曲している。下士官以上集合、脱出方法の協議にはいる。

敵は包囲網を縮め、先任の関根、小倉両軍曹と、有馬兵長以下三人が凹地に待機中、前後して敵迫撃砲を受けて即死された。この精銳の戦死には皆内心動揺した。こんな時、西の部落に食物でもあるかと捜しに行った兵隊が、その部落で敵兵を見かけたと報告する。斥候を命ぜられたわけでもないのに、正しく怪我の功名でした。こうなると、西方は安全だという根拠が揺らぎます。戦線は彼我膠着のまま推移していった。

私は戦後、戦友会で知ったのだが、戦友の証言で「暗くなつて、南東四〇〇メートルに二人が潜伏斥候として出発した。その南方の農家の独立小屋で、敵襲を早く察知して、抵抗しながら退却し通報しに来了。その時『藁ぐろ』に火をつけられて、首をだしても平野だから浮き出て弱った」と

のことである。

四十何年も経つての会合で「君にだけは是非聞いて欲しかった。今日は来て良かった。実は、かくかく、しかじか」と積年の心中のわだかまりを、私にブツツケた。私も信頼されていたのだと、嬉しい思いでした。敗軍の兵、戦を語るです。「任務と友情との背反」いろいろ話もあるでしょうが、靖国神社は生き残った戦友との会合の場でもある。

話を元に戻します。夜になって戦死者は直ぐ南の橋梁の河原に、それぞれの分隊で銃剣で穴を掘り埋葬、遺骨として手首や指を戦友が持つて逃げることになった。「ワシヤ、ヨウキラン」「ソナコトデドウスルンヤ」などやり取りの後、しっかりとした者が銃剣で切断する。

日没と共に野戦は一応の凍結に入り、南東に独立小屋を焼かれた劫火が煙り、悲壮感は更に増し夜はだんだんに更けて行く。「今夜の月は何時に

落ちるか」と私は農家出身の兵に確認した。上弦の月が沈まなければ脱出できないからである。しかし「腹が減っては戦さができぬ」であるから線路上の台車に置いて来た飯盒から、残っているもう一食分の飯を食べる。朝、株州で炊いて塗田で食べるはずの飯はカンカン照りで、甘酒でもないが、腐つてもいない。無味だがカロリーはあるだろう。

私はそれから、某兵に頼んで台車の間近の味方側の西側路盤で、英気を養うため、別行動があるまで敵前で一眠りした。頼んだのは某一人だが、私がそこで眠っていると知っているのは十五人はいら。一眠りして目覚めたら、なんと誰も居ない。「しまった、これは寝過ぎた、しくじった」と兎と亀の童謡どころではない。足元の大地が裂けて、吸い込まれる心地でした。ここは戦場、しかも敵に包囲されている。もう少し他の兵に頼んでおけばと後悔したが後の祭です。

「こんな時は、事態が判るまで冷静に」と思

い、大氣中よりレールの方が音をよく伝導するのを思い出して、レールに耳をつける。一縷の希望を込め、暫くすると微かに音がする。耳を離すと音も離れる。敵の重圧のある後方からではない。南から段々と大きくなるのは嬉しいが、そうなる敵か味方か、それで生死は決まる。

隠れていると、影もソロソロ台車に近づき、探しあぐねて只一言「ナイ」是れは正に日本語、友軍だ。「地獄に仏」とはこの事、サツと心も融け、彼を驚かさぬよう、つとめて柔らかく、一語一語区切って「だれや！」と言うと、彼は腰を引き、両手を空中で泳がせ、暫くは言葉もないが、彼も私が日本人と判ったので「お前こそ誰や」とにかく彼、佐々木上等兵は私の恩人だ。

線路の土手の犬走りを歩きながら「敵に脱出を発見されるから装具はそのままにして、武器と飯盒だけ持って、むこうの橋に全員集合している。どうしても持って行く品があったので、取りに来たがなかった」と私に説明した。楠正成の城抜け

戦法だ。

橋に近づくと、闇夜でも集結しているのがわかる。人員点検で私が欠けているのが判り、隊長がこの緊迫時にもかかわらず、呼びに行くよう指示するのを嬉しく、最後部から「只今、参りました」と低く報告すると「ホー！」と誰ともなく安堵の息が洩れる。でも誰か一人、無言の抵抗をしていた。

人員の確認は済んで、即死二人、負傷者は皆無。小隊の先任下士官の関根軍曹は戦死したので代わって飯塚軍曹。出発に当たり、先任として次のような注意があった。全員生死が懸っているから必死である。

一、この飯塚が只今より脱出の指揮をとり先頭となる。どんなに恐ろしくても、私が射てというまで射つな。この注意は絶対に守るよう。敵に包囲される恐れあり。

二、(物)音をたてるな。(発言は勿論)

三、落伍は死となる。列の間隔を締めよ。

四、夜間なれど着剣はしない。重くなる（と感
じる）のと、光危険あり。以上。

この順序で簡潔、明瞭。

四分隊長、新井伍長が殿（しんがり）を申し出て、すぐ出発。敗戦、撤収作戦の殿軍は、労多く、功少なく、この人の行動は平素に変わらな
い。

台車の装具はそのままにして、敵を安心させるため一人宛が、その内から飯盒、雑嚢だけを取り出したそうだ。「その時に何故私を起こさなかつたか」と思うも、それはそれ、一人の仕業だ。とにかく飯を喰い、寝ていたのは私一人。

一列縦隊、一キロは線路を通らず、西、湘江側の「犬走り」を通って南橋梁へ。犬走りは案内障害物が多く、溝渠の度に線路まで登る不便がある。とうとう線路の路肩を歩くが、敵の立哨小屋らしい所も、迂回せず一列縦隊強行突破を覚悟して進む。

住民は勿論、音にも影にも怯え、犬も敵だ。犬が吠えるは至言である。日本軍の装備は、夜間の隠密行動には不適。銃のある軍靴、鉄の劍鞘、飯盒。「シー」と前方より逡伝。とにかくこの騒音には最後まで悩まされ、とうとう発砲され戦死者も出る。暫くすると、またガチャガチャである。

一直線に線路は南下するが、前途に友軍がいるとの保証も何もない。孤立無援の一隊は音を殺して黙々と南下する。先頭の飯塚軍曹の右手が銃の引き鉄に、続く者でもある。急に左より低く中国兵の渡河、先頭は無言のまま、彼の腹に銃口を突き当てる。続く者は足を開き腰を引き、構え銃。

俄に粛殺の気があたりにみなぎる。如何にこの歩哨線を突破するか。中国兵は二、三回何か吠くが、半円に包囲する日本兵、中国兵は自分の気持ちを整理している。上体を前に傾け列の後方を見て納得と東に背をそむける。若い敵兵だった。

文字通り闇取引だ。一列縦隊で銃の引き鉄に指を、銃口を移動させながら、後をすり抜ける日本

兵。歩哨の背中、右後方二〇メートル下の谷間の民家は、中国語で喧しい。その奥の方に在る家々に少々の灯火がチラチラ。中国軍が夜遅く到着して、宿舎の割当てや炊事、設営、命令受領と忙しい。こんな時は日本軍も同じことで、敵は我々の隊列を友軍ぐらいに思っていたかも知れない。

一発の銃声は事態を急変させる。包囲されたら離脱は不可能だ。今は暴発、恐怖の発砲なかれと祈るのみであった。今こそ離脱できる最後のチャンスだからです。昼間は絶対不可能。明晩は敵の陣容が整備されているからである。しかも、今は敵も取り込み中だからである。同じような地形を同じようにしてあと二回飯塚軍曹を先頭に敵の歩哨線を突破する。特に、この脱出行の、本科歩兵出身の飯塚軍曹の行動は、大胆にして細心。よく一隊の安全につくしていた。私はハラハラ。逆立ちしても、あの芸当はできない。もしあの時、銃口を敵兵に突き付けたまま発砲すると、銃身が膨

張、破裂するから三〇センチは離さないと危険であろう。軍曹は後日酒席で「戦闘中はやり甲斐があったが、鉄道の運転が始まって判らぬことも多い」と駅長時代を回想していたことがあったが、私はそのお陰で今生きています。

隊の先頭集団はいつとはなく精強があつまり、歩度（速度）を上げ、隊列は延び、兵隊は黙々と歩くのみ。今が命の懸った正念場。時々前方から「シー」と声があると少しの間は静かになる。隠密行動なのに、とにかく後方はやかましい。私は先頭から四番目だが、もうここでは新井伍長もこの集団に加わり、私とうなずき合う。いつまでもためらえず、歩み板を渡る。カタン、コトン、コトン、カタンと日本軍の軍靴は半張りには鉄鋌、踵には馬蹄形の鋌だから、騒音は山谷に響き渡る。もう「シー」ぐらいの叱声では駄目だ。

軽装になっても、銃、剣、飯盒を持っている。四つん這いになったら音をたてないと思うが、早

く対岸に着くことが先決。そのうち延びた隊列の中央が渡った時、左後方から重機関銃の掃射だ。もうこうなると強行突破か迂回しかないが、助かった確率は強行突破の方が多かった。しかし、敵は夜遅く到着したらしいが、「闇夜に鉄砲」というが照準を固定してあった為か、弾着は正確だった。その後、救援部隊の兵隊が「山上から、いたいたしく見ていたら、あんた達が来た。東の陣地からあそこは丸見えだ」と説明をした。

橋を渡ったら、もう払暁で霧が立ち籠めた。夜が最大の保護神だったが、それが無くなったら霧が助けてくれた。我が隊は正面の枕木を利用した友軍の陣地にある銃眼を無視して直進した。友軍の歩哨が気色ばんで、「誰か」「友軍」の合言葉は知らない。「ユーグン！ ユーグン！」というだけ。

「何部隊か」「鉄道隊」「後を向いて立て」「合言葉は」……もう返答ができない。唯、母の懐に飛び込んだような安心感がある。後続の者の中に

は「地獄に仏」とばかり、歩哨の脚を両手に抱えた者もいた。「歩哨もそのままにしておいてくれた」と私に述懐した者もいた。

この橋が渡れず、夜を待つて橋上をソロソロと歩いたり、泳いだり、迂回したりで三日間で、一人を残して全員到着した。その後敵は橋に放火、炎上落下。この火の手を朱亭山上より「後続は追及不能」と暗澹たる思いをしたものである。この橋梁はその後も、満載の列車が落下し、積荷の砲弾等の誘爆で三日間も近付けなかった。

昭和十九年六月二十六日から二十七日にかけての鉄道部隊追及の小部隊の知られない戦闘状況であり、薄氷を踏んだ体験であります。